いつもあなたと共にいる

ドン・ボスコの風

BOLLETTINO SALESIANO • MAGGIO 2008

創刊号
特別企画

私たち・サレジオ家族

We are SALESIAN FAMILY.

特集 1

「浜松から吹く風」

日本人ホームレスをブラジル人が援助。
炊き出し活動に麻丘めぐみさんが同行。

特集 2

「海をわたる風」

「地球に笑顔が満ちるまで」を合言葉に
海外ボランティアで汗を流す若者たち。

特別インタビュー ● 水木しげる

創刊号
2008年5月

「風」のカレンダー

五月

聖母月

新緑が萌え、風薫る五月には母の日があります。カトリックではこの月を聖母月と呼び、教会やカトリック系の学校は感謝と崇敬の気持ちで聖母マリアを称えます。

聖母マリアにはいろいろな称号が与えられていますが、一八一四年五月二四日、時の教皇ピオ七世はナポレオンの幽閉から解放された感謝として、この日を扶助者聖母マリアの祝日に定めました。すべての危険や悪から私たちに扶けの手を差し伸べてくださるその優しく力強い扶助者聖母マリアにドン・ボスコは特別の信心を持っていました。ある時ドン・ボスコの目に、扶助者聖母マリアが家のあちらこちらを歩き、祝福していらっしゃる姿が見えました。ドン・ボスコはその姿にたいへん感動し、このことから聖母マリアの行列が行なわれるようになりました。聖母マリアの像を担いでまわるのは、目に見える形でマリア様に歩いていただき、参列者や建物、場所などを祝福していただくためです。

サレジオ関係の教会や学校では、世界のどこでも扶助者聖母マリアを称えて聖母祭を行います。この日は、時間こそ違いますが世界中に聖母マリアへの祈りがあふれます。

写真は東京・赤羽の星美学園。幼稚園から短大まで学園全体がひとつになり、日頃いただいているお恵みに感謝し、聖歌を歌い、お祈りをしながら盛大な聖母行列が行われます。

親愛なる日本の読者の皆様

私は“Bollettino Salesiano”の日本版が発行されることをずっと前から希望しておりました。これが叶い、「ドン・ボスコの風」という名称で創刊されることを聞き、私は本当に喜んでいます。

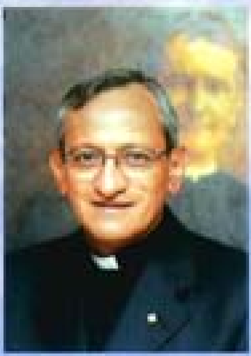
イタリアで130年前にこの雑誌を創刊したドン・ボスコは次のことをその目的として掲げました。

- サレジオ会が神様の祝福と恵みを多くの方々に与える可能性を広げること。（会の組織と使命の紹介）
- サレジオ会の行なっている善行活動などに関わる方々の心を一つに結び合わせること。（帰属意識と参加意識）
- サレジオの精神（これをドン・ボスコのカリスマと呼びます）に現れるドン・ボスコの深い理念を広げること。

すなわち、青少年を優先して選択すること、人間形成の価値と青少年の善になることを予め見抜くこと、青少年に指導や教育を与える方法とスタイルを与えること、新たに使命に賛同する方々と組織を作り、その一致団結を守ることなど。

これこそ現在まで欠かさず発行され、世界中の各国語で出版されているこの雑誌の基盤となるものです。

青少年が未来に向かって正しく育つことを願う私たちの心が、読者の皆様に伝わることを祈っております。



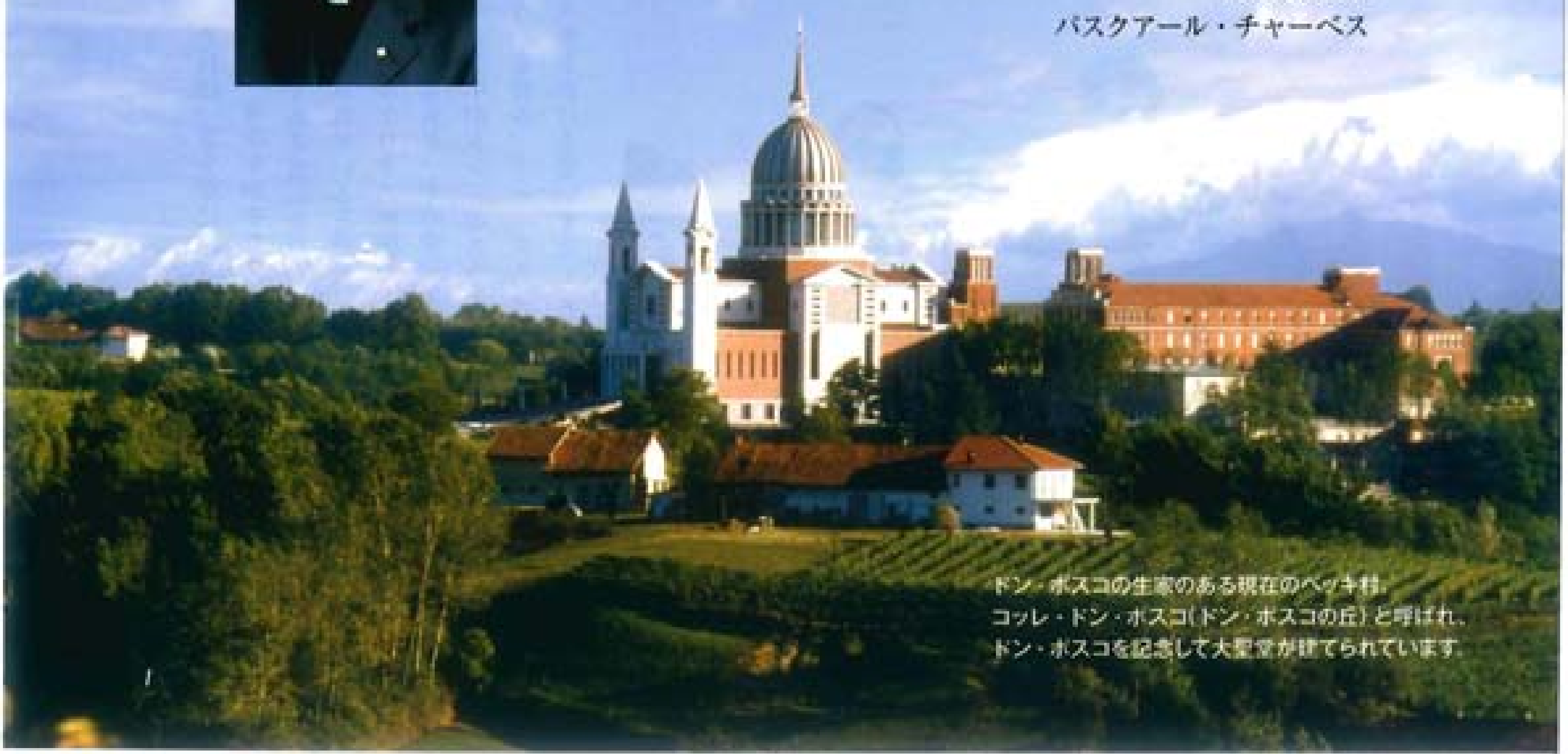
ドン・ボスコの心において

2008年3月27日　ローマより

Pascual Chávez V.

Fr Pascual Chávez V.
Rector Major

サレジオ会総長
パスクアール・チャーベス

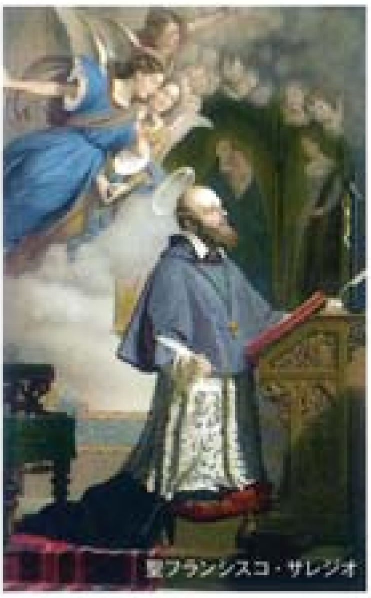


ドン・ボスコの生家のある現在のベッキ村。
コッレ・ドン・ボスコ（ドン・ボスコの丘）と呼ばれ、
ドン・ボスコを記念して大聖堂が建てられています。

私たち・サレジオ家族

今、「ドン・ボスコの風」を読んでいるあなたは何らかの形で「サレジオ」と関係している方だと思います。はじめまして！自己紹介をさせてください。

サレジオ会日本管区長
オランド・ブッポ神父



聖フランシスコ・サレジオ

「サレジオ」とはフランスのある町の名前です。

数百年前、そこに知恵の面でも聖性の面でも優れていた実に素晴らしくて優しい方がいました。

その名は「フランシスコ」でした。

その方の影響は今に至るまでとても強いものです。

イタリアのトリノという全く別の町にヨハネ・ボスコ（愛称：ドン・ボスコ）という神父がいました。

彼は、社会的に困っている青少年や、社会を困らせている青少年の人間形成に尽くしながら、自分に出来る職業や学問、そして言うまでもなくキリスト様のことを分かちあっていました。

これを見て賛同した多くの人々も、助けを必要とする方々、特に青少年・子どもたちのために、彼と共に働きたいという憧れを感じ、彼の「スタイル」を身につけて協力していました。

ドン・ボスコのお母さんが最初の一人でした。

ドン・ボスコの青少年との接し方には特徴がありました。

それは、青少年に隠されている神様の似姿を見い出し、青少年がそなえている理解力と心に語る神の声である良心を生かしながら指導し、自分が真に愛されていると感じさせるものでした。

母マルゲリタの影響やドン・ボスコ個人の人柄の魅力もあり、その青少年との接し方を見て数人の青少年がドン・ボスコと共にずっといたいという心を育み、ドン・ボスコのように他の青少年に人生をかける誓いを立てました。

聖ヨハネ・ボスコと母マルゲリタ

神様に誓うので、それを「誓願」と私たちは呼んでいます。

―［従順の誓願］
ドン・ボスコについていき、従う。

―［清貧の誓願］
自分のものを何でも自発的に分かち合い、それを青少年のために使う。

―［貞潔の誓願］
すべての人を限りなく兄弟姉妹として愛し受け入れることを決断し、自分個人の家族を作らない。

すなわち、キリストご自身がなさったように、神様と人々の善と幸せのために生きる道を共同体として歩み始めたのです。

そしてはじめに述べた聖人、サレジオのフランシスコをモデルに選び、自分たちに「サレジオ修道会（略称サレジオ会）」という名をつけました。

一八五九年十二月、これが私たちサレジオ会の始まりでした。

小さくスタートしたそのグループは現在では世界の一二八カ国、肌の色の違う一万六千人もの兄弟会員の修道会になっています。

この修道会と同じ心を持った修道女会であるサレジアン・シスターズ（扶助者聖母会）もイタリアのモルネーゼで創られました。

そして特に福祉を中心としたグループとして日本で創られ、愛の徳を生きながら立派に尽くす宮崎カリタス修道女会という会もあります。

また、誓願は無くても一般の社会生活を行う中で同じドン・ボスコの「カリスマ」を実践することを目的とする会もあり、ボランティア活動に燃える青少年もいます。

このように、ドン・ボスコが創った会が日本を始めとする世界の多くの国々に沢山あり、全てを合わせると四十万人もの「サレジオ家族」となっています。

今、特に色々な意味での貧しさに置かれている青少年の尊厳を見つめながら、彼らの人間形成のための教育・社会福祉・出版・教会活動に努めています。

そして、今日本でも真剣に考える必要が出てきたエミグラント（海外からの移住者。特に出稼ぎを目的にした人々）や痛ましい体験をしている青少年、人格が尊重されていない人々、人間としての自分自身を見失っている人々、特に若い人々の本当の自己再発見への協力などに尽くしています。

「君が若者だというだけで大切に思う」とドン・ボスコが言っていたように、私たちもそうしています。

このカリスマをさらに多くの人と分かち合いたいと願う、私たちサレジオ会員とサレジオ家族です。

どうぞよろしく！

管区長感謝の日に集まったサレジオ家族

日本・ブラジル移民一〇〇周年の今年、ブラジル人による炊き出し活動を追う。

ブラジルから出稼ぎに来ているブラジルの人々が、日本人ホームレスのために炊き出し活動をしているという。日本に住むブラジル人の多くは工場労働者。それほど高くない給料に加え、健康保険や労働条件など、たくさんの差別を受けている。言葉や習慣の違いに戸惑い、リストラや高すぎる医療費、子どもたちの教育の悩みが尽きない中で、この人たちはなぜ、日本のホームレスを助けようとするのだろうか。麻丘めぐみさん一行に同行し、取材した。

野口桂子（星槎大学准教授・国際比較教育研究家）

ブラジルと日本の移民の歴史

明治三一年、西暦で言えば一九〇八年六月、最初の移民船笠戸丸がおよそ八〇〇人の日本人を乗せてブラジルへ上陸してからちょうど一〇〇年になる今年、日本ブラジル交流年として各地で記念の行事が開催されている。

この一〇〇年の間、ブラジルの日系人とその子孫のコミュニティーはおよそ一五〇万人余りまでに増えた。

一九八五年のプラザ合意による円高によって日本での就労が魅力的となり、更に一九九〇年には、出入国管理及び難民認定法の在留資格の再編が行なわれ、出稼ぎ現象が加速し、現在では三十一万人を超えるブラジル国籍者が日本に滞在するまでとなった。

浜松には、日本で一番多くのブラジル人が住んでおり、その数は一万九〇〇〇人を超えると言われている。

それだけに浜松では、ブラジルのフェスタ（祭り）が年に三、四回も開かれ、ブラジル人を対象とした店やレストランも軒を並べるようになっている。

炊き出し活動

サレジオ会の比嘉エバリスト神父が十三年前、この活動を始めたきっかけは、「高架下にブラジルの野宿者がいる」という電話を受けたことだった。

探しに出かけた比嘉神父が「ブラジル人」の代わりに見つけたのは、日本人ホームレスたち。

「お金持ちだと思っていた日本という国に、こんなにたくさんのホームレスがいるのか」と衝撃を受けた。

ブラジルで幼い時から、困っている人がいたらすぐ助けるのが当たり前と育った神父は、最初は

みんなで黙々とおにぎりを握ります

比嘉神父（左端）の説明を聞きながら、ブラジル人経営のパン屋さんから贈られたパンを分ける

たった一人で炊き出しを始めたが、ブラジル人の同胞やペルー人に声をかけて一緒に活動するようになり、そのグループ名をエスペランザ（希望）とした。

現在では、少数ではあるが日本人も参加し、総勢一〇〇人を超えるメンバーが協力するようになった。彼らは仲間たちと集い、一緒に活動をすることをとても楽しみにしている様子だ。

カンパを集め、物資を運び、毎週土曜日となれば、勇んで「比嘉神父の家」に集まり、楽しそうに炊き出しの準備にあたる。

エスペランザの中には家族ぐるみで参加しているメンバーも多い。

連れてきた子どもたちがクスクス笑いながらいたずらするのを、大人たちがやさしく相手をしながら作業をしている。

これこそ日本人の家族がどこかに置いてきた姿ではないだろうか。

親子で一緒に、ボランティアをする、こんな情景が日本の家庭で見られるならば、家族間の断絶などはなくなるに違いない。

ジャーに入れたおにぎり、みそ汁を手に地下道へ向かう

はじめは少し緊張気味

だんだん会話が始まります

活動を終え、親子を含むボランティアたちと

比嘉神父

比嘉神父に、「この雑誌を読んでいる方々にメッセージをください」とお願いすると、こう話してくださった。

「広い心を持ってください。

時々日本人から、『なぜこんなことをするのか？』と聞かれます。

『自分たちが衣食住に足りているのは、努力してきた結果。ホームレスは、怠けていた結果、ああなったのだ」と。

でも彼らの現実は違う。懸命に働いて息子に教育を授けたのに、息子が結婚して同居したらいつの間にか家族に疎まれ、居場所がなくなってしまったとか、北海道から出てきて事業をしたけれど大失敗。でも故郷に帰れないとか、様々だ。

隣人が困っているときは〝他人のこと〟としないで、まず共に居ることです。」

比嘉神父を中心とするグルーポ・エスペランザの方々の、あまりにも当たり前の奉仕活動に触れた私たちは、心の底から温められ、とても豊かな気持ちになって、深夜、帰途についた。

麻丘めぐみさんのプロフィール

三才から子役として舞台、コマーシャルにと活躍。一七才「芽ばえ」で歌手デビュー。レコード大賞最優秀新人賞受賞。その後も「わたしの彼は左きき」等のヒットで七〇年代のトップアイドルとなる。女優、歌手、司会等と活躍の場を広げ、近年は演劇集団「シアタードリームス・カンパニー」の主宰となり、演出、プロデュースも行っている。二〇〇三年クリスマスに受洗。

「また、その笑顔に会いに来るからね！」

三月下旬、桜は満開とはいえ北風の冷たい日、日本で一番ブラジル人が多く住む浜松に、私が所属する調布教会の仲間たちと訪問することになりました。目的は比嘉エバリスト神父様がなさっている活動に参加するためです。

Casa de Don Higa 「比嘉神父の家」にて

神父様は日系ブラジル人で穏やかな方です。緊張している私たちを温かい笑顔で迎え入れてくれました。初めて訪れた場所なのに前から知っているような錯覚に陥るほど、活動の拠点のアパートの、その部屋全体が私たちを受け入れてくれていました。

部屋ではホームレスの人たちの夕食にとブラジルの人が大きな鍋に具沢山のみそ汁を作っていました。傍らでは支援者の女性がおにぎりを握りながら「今日は私一人なので、皆さん手伝ってくださ〜い！」早速ご飯を分ける人、梅干を入れながら握る人、海苔を巻く人、みんなで黙々と握りました。"私が誰かのお役に立っている" ということが嬉しくて仕方ありませんでした。

いよいよ出発です！

夕方のミサが終わって 10 時になり、私たちの握ったおにぎりを冷めないようにジャーに入れ、おみそ汁と温かいお茶の入ったポット、小分けにしたパンを持ち、ブラジルの人たちと一組 6 名ほどの 3 グループに分かれ、それぞれ浜松駅地下道、南方面、北方面に出発です。私は駅の地下道へ行くグループに入りました。

"何を持てばいいのかな" と戸惑っている私に、さっとポットが手渡されました。うれしかった！駅までの道も冗談を言っては私に話しかけてくれました。北風は冷たく、寒くて暗い道でしたが、同じ目的で動いている人たちと心が通じていると思うだけで、とても幸せな気持ちになりました。

地下道ではホームレスの人たちが、もう列を作って待っていました。

13 年間、雨が降っても、雪が降っても、台風の日でも毎週土曜日のこの活動は一日も休んだことがないそうです。「嵐の日にも出かけるのですか？」私の問いかけに「どんな天気でもお腹は空くからね！」とやさしい言葉です。

「〇〇さん元気？」「風邪は治った？」「たくさん食べてね」と声を掛けながら用意したものを配ります。私も思い切って「こんばんは！」と声を掛けると「こんばんは」と返ってきます。そこには笑顔の人たちがいました。ブラジルの人たちの明るい笑顔が彼らを笑顔にしているのです。

「麻丘めぐみだろ・・すぐわかったよ」うれしそうに話しかけてくれたおじさんたちと一緒におみそ汁をいただきました。美味しかった！！　今までに感じたことのない暖かさと幸せが私の体を包みました。

配り終わって比嘉神父の家に戻ると、他の場所に行った人から「今日麻丘めぐみが来たんだってね。会いたかったなぁ。俺もさ大ファンでね、30 年前には家でテレビを見ていたんだ。♪左きっき♪をね！」と嬉しそうに笑顔で話してくれたおじさんもいた、と聞きました。

私の仕事

私の仕事は、いろいろな人に歌やお芝居で夢を与える仕事です。

でも、ふと本当に夢を与えられているのか？と不安になることがあります。

浜松駅周辺のホームレスの人たちがあんなに喜んでくれて、たとえ一時でも昔の想い出に浸れたのかなと考えるだけで、これからも少しでも人に夢を与え続けられるようがんばろうと改めて思うことができました。

私もみなさんから夢や希望をいただきましたよ！
―おじさん、また会いに来ますからね！

麻丘めぐみ

サレジオ会

アシステンテと日本におけるサレジオ会事業

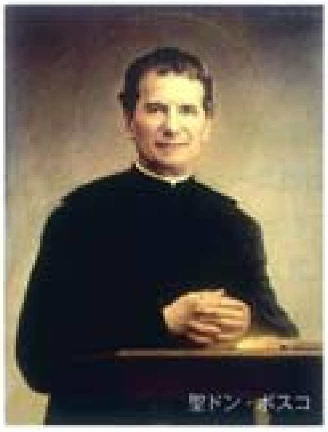
雨宮 泰紀 神父

原点

ドン・ボスコの原点は、イタリア統一運動と産業革命の只中で、誰からも相手にされず少年院や刑務所の中にいた青少年であり、ひどい労働条件の下で働いている青少年、仕事もなく悪に染まっていく青少年でした。

ドン・ボスコは目の前にある現実から出発し、永遠の視点から一人ひとりの幸せを実現しようとしました。

彼が最初に始めた事業がオラトリオ（日本ではユースセンターともいいます）です。イタリア語で「祈りの家」という意味です。



聖ドン・ボスコ

はじめは「日曜学校」のようなものでしたが、次第に子供たちをそこに住まわせるようになり、その家で仕事のための技術や読み書き、算数などを教えながら、祈りを大切にする共同生活を送っていました。恐ろしく貧しかったようですが、本当に幸せな場所だったようです。

そこでドン・ボスコが自らの教育の中心に置いたキーワードが「アシステンテ」です。すなわち、「共にいること」、「共にいて青少年のニーズに出会うこと」、「共にいて青少年の人生をアシストすること」です。

実はこのオラトリオのスタイルに一番近い形を保っているものがあります。それは志願院です。将来サレジオ会員になりたいと思っている中学生、高校生とサレジオ会員が共同生活をしています。

この志願院を卒業すると、もっと専門的な教育を受けるべく神学院に行きます。

サレジオ会第一回日本宣教団のチマッティ神父が特に力を入れたのも、この志願院と神学院でした。

サレジオ会のマーク

背景は、丸い地球にサレジオの「S」の形をした白い道が未来へと続いています。中心には、両手を広げて両脇の青少年を慈愛を込めて支えるドン・ボスコの姿。この3人の姿は、ドン・ボスコの教育法を支える「愛情、道理、信仰」を3本柱とする姿にも見えます。

日本では

さて、日本においては戦後の状況がドン・ボスコの時代に近かったと言えます。

国がまだ社会福祉と教育に十分力を入れることができなかった時代、多くのキリスト教の学校と施設がその役割を担いました。サレジオ会もその一つです。

はじめに聖ヨゼフ寮と東京サレジオ学園の、主に戦災孤児を対象とした児童養護施設が始まりました。

目の前にいる特に貧しい青少年のニーズに応えようとするドン・ボスコのスタイルです。現在では、児童

調布サレジオ神学院

四日市の志願院生たち

養護の対象となる子のほとんどが虐待、ネグレクト（育児放棄）を受けた子どもたちです。

学校に関しては、まず普通科の宮崎の日向学院、大阪星光学院、横浜のサレジオ学院の中学・高等学校、小平のサレジオ小学校・中学校が挙げられます。

ドン・ボスコのいたピエモンテ州で義務教育が法制化されたのに伴い、社会のニーズに応え、また子供たちが自分で将来を選択できるために識字率を上げなければならないと考えたドン・ボスコは、中等教育にも力を入れました。その流れが現在の普通科の学校の源泉です。

またサレジオ工業高等専門学校は、教育史の中でもドン・ボスコが評価されるオラトリオでの技術教育の流れを汲んでいます。

なお、大学生以上の青少年には、海外で現地の人と共に汗を流すボランティアのチャンスがあります。それがドン・ボスコ海外青年ボランティアグループです。

教会司牧については、教会の将来を担う青少年を育てる小教区、これがサレジオのスタイルです。

同時に南米宣教の目的の一つであった移民司牧の点では、現在横浜教区の大和教会・浜松教会を中心に、滞日外国人の方々のための司牧に力を入れています。今の日本の社会と教会の現実に適応しようとする試みです。

サレジオ会は幼稚園も、人生の始めから「アシステンテ」です。特に今日核家族化が進み、ともすると子育ての苦労に打ちひしがれたお母さんが孤立してしまい、子育てがうまくいかないまま時間が過ぎ、子どもが中高生、あるいは三十代になって様々な問題が表面化するケースも少なくありません。サレジオの幼稚園・保育園が、地域の人と人とをつなぐネットワークの核となっていくこともできるわけです。

他にドン・ボスコは出版事業にも非常に力を入れていました。ドン・ボスコ社、「カトリック生活」の出版なども、ドン・ボスコのスタイルに直結します。

おわりに

最後にもう一つ、日本管区ではこれまで十分に手の届かなかった青少年たち、今の日本で危険に晒されている青少年にどのように出会っていくことができるのかというプロジェクトが現在進行中です。

サレジオ会の「アシステンテ」は、これからもまだ続きます。

サレジオ会の教育事業

サレジアン・シスターズ

青少年がいるところには、どこへでも出掛けていく覚悟がある

日本管区長 シスター・若松 悠紀子

「青少年がいるところには、どこへでも犠牲を惜しまず出掛けて行く覚悟がある」、これがわたしたちと主イエスとの約束なのです。

ドン・ボスコはサレジアン・シスターズ創立のずっと以前、ある神父に次のように語っています。

「私たちは女性を通して巨大な善業を行おう。

キリスト信者の扶助者なる聖マリアから頂いた恵みに対して、私たちの感謝の義務は大きい。

では何で、それを現わそうか。

私はその恩寵を永久に忘れないために、すばらしい記念碑を立てようと思う。

それは何だと思う？ 女子の修道会のことだ。

その完成のあかつきには「扶助者聖母の娘たちの会」としようと考えているのだ。」

神様は聖ヨハネ・ボスコと聖女マリア・ドメニカ・マザレロに、同じ使徒的愛の賜物を与え、青少年を神のもとへと導くために女子修道会を建てられました。一八七二年八月五日、イタリアの名もない村モルネーゼで最初の誓願式が行われ、ドン・ボスコはこの女子修道会に「Figlie di Maria Ausiliatrice（扶助者聖母の娘たち）」という名前を付けました。

それは彼が修道会創設にあたって聖母の確かな導きを実感し、この娘たちを歴史の中で受け継がれていく「聖母マリアへの感謝の生きた記念碑」として建てることを望んだからです。

聖マリア・マザレロ

こうして、この小さな村から全世界へと飛び立つサレジアン・シスターズが誕生したのです、ちょうどナザレのマリアの「はい」という承諾（新約聖書ルカ一章三八節参照）によって、神の救いが全世界にもたらされたのと同じように。

日本での本会の正式名称は「扶助者聖母会」（略称ＦＭＡ）と訳されていますが、現在では「サレジアン・シスターズ」という呼び名で呼ばれています。

それは世界九一カ国で働く多くの会員たちが「サレジアン」として親しまれているからです。

日本では、チマッティ神父の招きによって一九二九年に来日して以来、日本の各地で、児童養護施設、幼・小・中・高・短大の学校事業、教会学校、児童館、滞日外国人司牧、ＶＩＤＥＳ（教育と開発を目指す女子国際ボランティア）のほか、海外宣教にも姉妹たちを派遣しています。

サレジアン・シスターズの教育事業

星美学園幼稚園（東京都北区）
星美学園小学校（東京都北区）
星美学園中学校・高等学校（東京都北区）
星美学園短期大学（東京都北区）
目黒星美学園小学校（東京都目黒区）
目黒星美学園中学校・高等学校（東京都世田谷区）
調布星美幼稚園（東京都調布市）
静岡サレジオ幼稚園（静岡県静岡市）
静岡サレジオ小学校（静岡県静岡市）
静岡サレジオ中学校・高等学校（静岡県静岡市）
城星学園幼稚園（大阪府大阪市）
城星学園小学校（大阪府大阪市）
城星学園中学校・高等学校（大阪府大阪市）
長崎星美幼稚園（長崎県大村市）
大分明星幼稚園（大分県大分市）
星美ホーム（東京都北区）

Istituto Figlie di Maria Ausiliatrice

http://www.salesian-sisters.jp/

「彼らがいのちを受けるように、しかも豊かに受けるように」

サレジアン・シスターズでは、イタリアのローマ本部の専門スタッフが世界的な視点から研究と分析を重ねて作成した「FMA教育使命の指針」の翻訳を進めて参りました。

本書が書かれた目的と対象読者

現代社会はグローバル化やテクノロジーが急速に発展し、様々な新しい可能性をもたらしました。

教育を使命の柱とする私たちサレジアン・シスターズが、この激しい変化を捉えて青少年の世界をどのように読み取り、理解し、どう働きかけていくかについて、指針を明確に打ち出すことが、本書の目的です。

この本は、サレジアン・シスターズの教育環境で共に青少年の全人間的な成長にたずさわるすべての方々に宛てて書かれたものです。

教壇に立つ者ばかりでなく、青少年、特に成功の可能性に恵まれていない青少年が、人間として全面的に成長するよう力を合わせてくださる全ての方々を対象としています。

指針の概要

サレジアン・シスターズが関わる青少年教育は、成長過程にある青少年を中心に置き、次の点に力を入れて実践してまいります。

- **現実を読み取った上で、命を大切にする文化を創り、育て、守っていく**
- **日々の体験を通して、青少年をイエスとの出会いへと導く**
- **青少年の中に活動的で連帯する市民性を育てる**
- **新しい技術やニュース・メディアを取り入れ、真のコミュニケーションの場を提供していく**

「居場所のない若者」と言われる現代の青少年が「いのちを受けるように、しかも豊かに受けるように」共に力強く道を歩み続けることができますように、聖母マリアの導きを祈ります。

サレジアン・シスターズが保護のマリア様としている扶助者聖母像

ドン・ボスコは一八四四年に、そびえ立つ見事な教会を夢に見ます。そして一八六八年、トリノの「扶助者聖母大聖堂」の建設によってそれを実現します。

聖堂に置かれる聖画の図柄は「高い所には天使たちの中に聖母、その周りには十二使徒たちと福音記者、聖母の足もとにはオラトリオ」とドン・ボスコ自身が画家のロレンツォーネに依頼したものです。

この聖堂にドン・ボスコとマリア・マザレロの遺体も安置されています。

宮崎カリタス修道女会

「人々の心に入るための唯一の手段は愛（カリタス）である」

日本管区長 シスター・橋口 暁子

紋章について
イエス・キリストの「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」（マルコ16:15）、「憐れみ深い人々は幸いである」（マタイ5:7）とのみことばを日々の生活と活動の基本的な要素として、すべての人、なかでも貧しい人、病める人びとにイエス・キリストの聖心の愛を告げ知らせ、献身的な愛の奉仕を行なうことを使命としています。

ドン・ボスコが最初の宣教師たちに与えた言葉です。

カヴォリ神父の勧めで宮崎教会の女性たちがはじめた貧しい人たちの家庭訪問がきっかけとなって生まれた救護院、そして救護院の人々をお世話するために組織された「愛子会」から生まれた宮崎カリタス修道女会。戦争中、救護院に集められたいのちを守るために自分たちのいのちをかけ、重労働と栄養失調による病で天に召された若いシスターたちの

創立者チマッティ神父とカヴォリ神父

「人々の心に入るための唯一の手段は愛（カリタス）である。」

サレジオ会第四代総長リナルディ神父は、はじめて日本へ送る宣教師たちに愛の大切さと必要性を諭しました。チマッティ神父とともに総長の勧めを生きながら、この修道会を創立したカヴォリ神父は、「カリタス」を修道会の名称に選び、カリタス会員が徹底的に神の愛に生き、その愛を人々に伝えることを望んだのでした。

一九三七年（昭和一二年）に創立された「宮崎カリタス会」は、すべての人、特に弱い立場にある人々とともに歩み、あらゆる手段によってイエスのみ心の愛（カリタス）を伝えることを目的としている修道会です。創立者たちからドン・ボスコの精神を受け継ぎ、特に弱い立場にある人たちに尽くした聖ヴィンセンシオ・ア・パウロの精神を特徴として愛の活動を行っています。

日本の宮崎県で生まれた小さな修道会は海外にも広がり、現在一一ヶ国で一〇〇〇人以上の会員が愛の奉仕に励んでいます。今も日本から海外宣教女を派遣し続けています。

二〇〇八年四月一日現在、一都一府一三県に四六の修道院があり、約四五〇名の会員が活動しています。他にフィリピン（一支部）とドイツ（一支部）の会員も日本管区に属しています。

日本管区本部は東京都杉並区にあり、隣接していた総本部は二〇〇八年、東京からローマへ移転しました。

事業創設七五周年を迎えて

二〇〇八年三月一五日、約三〇〇名の参列者を迎えて、宮崎のカリタスの園で事業創設七五周年記念式典が挙行され、同時に竹の寮（児童養護施設）の改築落成式が行われました。

「病人、子供たち、高齢者、そして貧しい人たちの世話を特別に引き受けなさい。そうすれば、神の祝福と人々の好意を勝ち得るでしょう」

宮崎カリタス会の日本における事業

墓が並びました。

ドン・ボスコの言葉を忠実に生きたサレジオ会員たちと宮崎カリタス会員たちの大きな愛と犠牲は、今豊かに実っています。

救護院が慈善事業からカリタスの園として社会福祉事業へと移行し、今も創設当初の精神を受け継いで活動しているカリタス会のシスターたちは、多くの恩人方、カリタスの園出身の方々とともに七五年の歴史を振り返り、感謝のうちにこれからも「カリタス」を生きる決意を新たにいたしました。

サマーキャンプにて

CARITAS SISTERS OF MIYAZAKI

カリタスの園・竹の寮（児童養護施設）2008年落成

昭和10年救護院総合施設（現在のカリタスの園）

子どもと過ごすひととき

愛子会会員と子供たち

救護院を救った労働

カヴォリ神父と子供たち

Associazione Salesiani Cooperatori

http://www.salesio.jp/web/salesianfamily/coops/coops.htm

サレジアニ・コオペラトーリ（旧サレジオ協力者会）

家庭や職場で、人々にキリストを伝えるサレジアン

マークについて
Da mihi animas
「我に霊魂を与えたまえ」の意味。ドン・ボスコが部屋の壁にこれが書かれたポスターを貼っていました。サレジオ家族の精神を表す言葉です。

ドン・ボスコが創立した会

ドン・ボスコは、サレジオ会を創立する以前から、居場所の無い青少年のためにオラトリオの活動を始めており、その活動に賛同し、彼を支えた人々がいました。

集まってきた何百人もの少年たちの世話をするばかりでなく精神的母親としての務めを果たしたドン・ボスコの母、マンマ・マルゲリタもその中の一人です。

ドン・ボスコが後に修道会を設立しようと考えた時、修道者のみならず、修道院には入らずに社会生活を送りながら、彼と同じ精神で生きたいと願うこれらの人たちのことも、規則書に一緒に盛り込もうとしました。

しかし、それはあまりにも斬新な考えだったので、バチカンから許可されませんでした。

そこで、修道者だけのサレジオ会を設立した十七年後の一八七六年、ドン・ボスコの使命に賛同して活動する会であるサレジアニ・コオペラトーリを正式に発足させました。

現在サレジオ会の魂を受け継いだ会員が世界に二万七〇〇〇人います。

マンマ・マルゲリタ

会員の使命

1 社会の中にいるサレジオ会員である

サレジアニ・コオペラトーリ会員は、修道院の外で普通の暮らしをしているということが大きな特徴です。

一人ひとりが家庭や職場などで、人々にキリストを伝える活動をします。

特に青少年に対しては深い関心と関わりを持ち、彼らのために力を尽くすよう努めます。

2 聖性をめざす

神様がすべての人を天国に招かれていることに信頼を寄せて生きます。

そのためによく祈り、霊的読書、黙想会や養成のための集会などに積極的に参加し、生涯、自己の養成に励みます。

3 教会の一員としての務めを果たす

ドン・ボスコがそうであったように、マリア様にご保護を求めながら、キリスト者として教皇様に忠実に従い、教会のメンバーとしての務めを果たすよう努力します。

ヨーロッパ各地から集まったサレジアニ・コオペラトーリ会員の子どもたち
2000年国際家族年記念大会ミサにて
（ローマ・チネチッタ）

活動の一例：南米国籍の子どもたちに神様の話をする会員

日本のサレジアニ・コオペラトーリ

一九二六年、イタリアからチマッティ神父を団長に九名のサレジオ会員が来日し、宮崎で活動の一歩を踏み出したとき、その事業を助けた人々が最初の会員といえるでしょう。

月例の日本管区本部評議会

会員になるためにはある期間必要な養成を受けますが、会員になったから特別なことをするというわけではありません。

日常生活の中で自分にできることを自由に選択しますので、会員一人ひとり取り組んでいることは異なります。

例えば、いろいろなボランティア活動、地域での社会奉仕、お年寄りや病人の世話、困っている外国籍の人たちへの援助、暖かい家庭作りなどです。

活動できなくなった人でも、活動している人を祈りで支えることができます。

大切なことは、自分に与えられた使命をよろこんで果たすという心、即ちサレジオ会の魂を持つことです。

現在日本各地に十二支部、約一〇〇名のカトリック信徒が会員として活動しています。

（会の名称は、サレジオ会の精神を受け継ぐ「共働者」を意味するイタリア語です。）

SALESIAN CO-OPERATORS

日本管区の支部

支部名	所在地	
赤羽支部	東京　赤羽	サレジアン・シスターズ本部修道院
目黒支部第一	東京　目黒	碑文谷教会
目黒支部第二	東京　目黒	碑文谷教会
調布深大寺支部	東京　調布	サレジアン・シスターズ修道院
調布富士見支部	東京　調布	サレジオ神学院
四谷支部	東京　四谷	サレジオ管区長館
静岡支部	静岡　草薙	サレジアン・シスターズ修道院
名古屋・大阪支部	大阪　玉造	サレジアン・シスターズ修道院
北九州支部	福岡　北九州	湯川教会
別府支部	大分　別府	別府教会
宮崎支部	宮崎　宮崎	日向学院
長崎支部	長崎　大村	サレジアン・シスターズ修道院

特集2 海をわたる風

ドン・ボスコ海外青年ボランティアグループ

地球に笑顔が満ちるまで

ことのはじまり

一九九一年、雲仙普賢岳で火砕流が発生して大惨事となり、海外ではハイテク戦争と呼ばれたイラク湾岸戦争が始まったその年、「地球に笑顔が満ちるまで」を合言葉に「ドン・ボスコ海外青年ボランティアグループ — Don Bosco Overseas Youth Volunteers Group（DBVG）」は生まれました。かつて調布のサレジオユースセンターに通っていた七人の青年たちと溝部脩神父（元サレジオ会管区長、現高松教区司教）が人生を語り合う中で、青年たちは「青春を賭けても悔いのない何かをしたい…」という思いを神父にぶつけました。その「何か」への答えがDBVGでした。

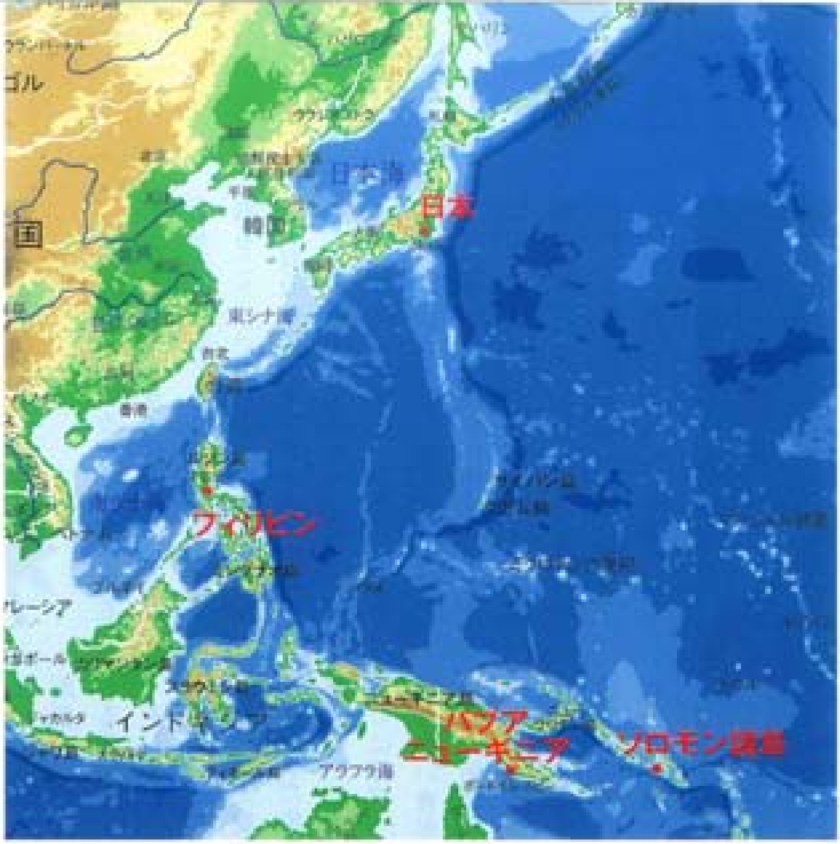
毎年夏の三週間、青年たちはアジア・オセアニア地域の発展途上国に出向き、現地のプロジェクトの要請に応じて様々な作業をします。スタート以来十七年間に東ティモールを皮切りにボリビア、そしてかつて日本が戦場として傷跡を残したフィリピン、ソロモン諸島、パプアニューギニアへと延べ三五〇人の青年たちが海を渡っていきました。

かつてそこは戦場だった

ある日のこと、青年たちが豚舎建設のために穴を掘っていると、その姿を一日中座ってじっと見ていた老人が声を掛けてきました。「戦争の時、日本人は爆弾で大きな穴を開けたけれど、今お前たちはそんな小さなシャベルで穴を掘ってくれるんだな、私たちのために…。」 戦争を知らない青年たちは作業の合間に過去の激戦地を訪れ、今も残る戦禍の跡を目の当たりにして戦争の悲惨さを思い知り、改めて平和の尊さを痛感します。

ボランティアって何？

初めて参加する青年たちは、「貧しさに苦しむ彼らの生活を少しでも良くしたい」「人の役に立ちたい」「助けてあげたい」と意気込んで出発して行きます。現地での作業は、鶏舎や豚舎の建設、敷地のフェンスの設置や校舎のペンキ塗り、バスケットボール・コートのコンクリート打ち、



道路の補修など、訪れる国や地域によって異なります。炎天下流れる汗をぬぐいながらの作業は青年たちにとって相当な重労働です。しかも何の技術も持たず、それほど体力があるわけでもない普通の学生である彼らは、思うようにはかどらない作業に「現地の人たちの足手まといになっていないか！」「何のために来たのか？」「こんなはずじゃなかった…」と落ち込みます。

そんな青年たちを現地の人々は温かく迎えてくれます。青年たちは苗の植え方や機具の使い方、セメントの捏ね方などいろいろな作業を教わり、共に汗を流して働き、語り合い、共に祈り分かち合いながら生活していくうちに、過去の過ちを許し自分たちを受け入れてくれる彼らの寛大さと優しさを実感します。そして、助けるつもりで行った自分たちが逆に助けられていると気づきます。「君たちが来て手伝ってくれたから私たちも頑張ることができた。」「一緒にいてくれるだけで私たちはとてもうれしいよ。」と言ってくれた現地の人々の言葉に、ボランティアの基本は経済的支援でも、ただ何かを作ってあげることでもなく、「共にいること」だと気づくのです。困っている人、助けを求めている人の隣で、その人たちのことを思いやること。そしてある時は見守り、ある時はためらいなく手をさしのべることじゃないかと。

帰ってきた青年たちは

海の向こうから改めて日本を見ると、今まで考えもしなかった本当の幸せや豊かさとは何かを肌で感じ取ることができます。生きている実感、自分のアイデンティティを確かめることができるのです。そして周りの人たちの笑顔に、自然に応えられるようになっていきます。青年たちは自分の中で何かが確実に変わったことを実感して帰国します。活動報告会では全員が例外なく感謝の気持ちを素直に表現します。ボランティアに行けたことに、準備をしてくれた人たちに、送り出してくれた両親に、出会った友達に、支えて下さる後援会の方々に…。

そしてこの体験は帰国後も生きています。一九九五年一月一七日「阪神、淡路大震災」が発生した時、彼らは「まだ危険ではないか?」と躊躇している大人たちの心配をよそにすぐに神戸へ向かいました。現地に行けない青年たちも「支援募金」のために街頭に立ちました。また児童施設やホームレス支援の活動に参加している青年たちもいます。彼らがDBVGでの体験から得たもの、それは人を思いやる心、身近に困っている人たちがいれば一歩踏み出して手を差し伸べるちょっとした勇気なのかもしれません。

DBVGの目的

DBVGの活動は外務省や他の団体からの助成金を受けることが困難です。民間のNGOとしてその目的があまりにもユニークだからです。「将来を担う日本の青年を育てる」という趣旨ではお金を受けることの説得力が小さいことはわかっています。

しかしあえてそこにこだわるのは、海外の異文化の中でのボランティア活動とその体験を通して彼ら自身も成長すること、成長した青年たちが将来家庭を持ったり社会と関わっていく中で、そこで得た何かをきっと周りの人に伝えてくれると信じているからです。

一人の神父と七人の青年たちが始めたボランティア活動は、後援会の皆様の経済的支援を頂きながら、現地の貧しい子どもたちへの学資援助活動を含めサレジオ会の事業のひとつとして発展しています。

DBVG事務局　丸山和美（サレジアニ・コオペラトーリ会員）

DBVGホームページ: http://www5a.biglobe.ne.jp/~DBVG/

©水木プロ

「ゲゲゲの鬼太郎」の作者として有名な水木しげる氏は、六十五年前、太平洋戦争の激戦地パプア・ニューギニアに兵隊として駆り出されました。平和なこの時代に自らボランティアとして同じ地に出かけたDBVGの若者たちが、水木氏の心の中にあるパプア・ニューギニアへの思いを知りたくて、水木プロダクション事務所を訪れました。

― 水木さんにとってパプア・ニューギニアとはどういうところですか？

皆さんパプア・ニューギニアに行ってきたの？いいとこでしょ！　でもね私はね、戦争で行ったんですよ。徴兵されて、行けといわれて。その時思ったのは「どこで死ぬかなぁ…」ってこと。なにしろ激戦地だったから。ほとんどみんな死にました。私は爆弾で左腕をなくしたけど、運が良かったから生き残った。私にとってパプア・ニューギニアは戦場です。私の「総員玉砕せよ」という漫画では、何のために多くの人があの戦地で死んだのか、あの時の自分の気持ちを描きたかった。

戦争がなければいいところですよ。ただマラリアがあるから気をつけないとね。

― 戦争中でも現地の人との交流はあったのでしょうか？

我々は防空壕の穴ん中にいて、そのすぐ上のところに現地の人の村があって、外へ出ると出会うわけです。向こうも初めは用心しますけど、二、三回会えばもう友達みたいになります。いい人たちですよ、みんな素朴で。手をやられて後方へ下がってからの方が現地の人とよく付き合いましたね。「畑もやるし、家も建ててやる。嫁さんも紹介するから残れ」って言われました。（笑）トペトロという名前の男とは特に仲良くなって、日本に帰って二八年経ってから彼に会いに行きました。一番大変な時に世話になったからね。あの時のことは、今でも忘れられません。トペトロもいろいろ覚えていて、会ったらお互いにすぐに分かった。うれしかったよ、ほんと。

― これから海外ボランティアへ行く若者たちへメッセージをお願いします。

私は一番つらい時に彼らに助けられました。だから人と人との関係は大事、一生忘れられないね。ボランティアも、そこに住んでる人のことを考えるっていうことが一番大事だね。皆さんもパプアニューギニアに行って、そこの人たちとしゃべったり一緒に汗を流したりして、そういう見識を持ったわけでしょ。日本の社会で働くことだって今の世の中厳しいからね。ボランティアの経験を活かして、一番大切なことは何かなと考えながら、社会人としてしっかり働いてね。

その日は偶然にも水木氏の八十六歳の誕生日でした。しかも水木氏は前日に「調布市名誉市民」として表彰されました。鬼太郎グッズやパプア・ニューギニアの木彫りの飾り物とたくさんの花束に囲まれて、それぞれのパプア・ニューギニアへの思いを心に描きながらの楽しいインタビューとなりました。

インタビューの最後に色紙にサインを書いていただきました

「一緒にいるよ！」

関谷 義樹 神父
「カトリック生活」編集長

サレジアンファミリーの活動の基盤にあるのはキリスト教ですが、キリスト教というと、西洋から来たちょっとこむずかしい宗教というイメージがあるかもしれません。でも、実は、キリスト教のメッセージは、ある意味とても単純明快です。それは、

「一緒にいるよ！」

です。

神様は、ご自分がお造りになった人間に対して、常にこのメッセージを発しつづけています。駄々っ子である人間が、

「ふん、神様なんかいらないぜ！ 俺様が神だぜ！」

と言って、自分から離れていっても（これが人間の歴史）、神様は決して人間を見捨てることなく、闇の中で苦しんでいる人間のほうに近づき、あれやこれやといろいろな手段で人間を救おうと苦心します。そしてこう人間に語りかけます。

「恐れることはない。私があなたと一緒いる！」

キリスト教では、この神様の言葉が最高の形（最後の切り札）で実現したのが、神であり人であるイエス・キリストにおいてだと信じています。イエスがインマヌエル（私たちと共にいる神）だと。

イエスはこの地上で一番小さくされた人たちと一緒にいることによって、神が一緒にいることを教えました。そして、みじめな十字架の死は、神から離れた悲惨な人間と同じ位置まで降りてきたことを表しています。しかし、それだけではありません。死んで私たち人間から離れてしまったわけではなく、復活して私たちと一緒にいてくれて、また、こうも約束しました。

「私は世の終わりまでいつもあなたがたと一緒にいる！」

ドン・ボスコという聖人は、イエスのこのメッセージをよく理解し、青少年とくに貧しく見捨てられた青少年たちに対して、それを展開していきました。自分から近づいて（友だちになって）、共にいることを通して、多くの青少年を導いたのです。ドン・ボスコはイタリア語で「アシステンツァ（共にいること）」という言葉でその精神を表現しました。サレジアンファミリーは、ドン・ボスコが受けとめたイエスのメッセージを現代につなげていく役割を担っているといえます。

昨今の、さまざまな痛ましい事件、たとえば親殺し、子殺し、無差別殺人、自殺、虐待、ひきこもり、いじめなどその背景には、人間関係のつながりが希薄になってきたこと、言い換えれば「共にいること」を忘れて、孤独になってうめいている現代人の姿があるように思います。

今一度、私たちは「一緒にいる」「共にいる」ということとはどういうことなのかを考え直し、問い直していく必要があるように思います。

「あなたは今、誰と一緒にいたいですか？」

「あなたは今、誰が一緒にいてほしいですか？」

そして、

「あなたは今、誰と一緒にいるべきですか？」

恐らく最初は自分を中心に、自分に近い人にしかその対象を広げられないかもしれません。でもいつしか、イエスのように、そしてドン・ボスコのように、さまざまな人に、特に弱っている人に目を向け、近づき、

「大丈夫だよ、私が一緒にいるよ」

と、声をかけて共にいてあげることができたらどんなにすばらしいことでしょう。この度創刊されたこの雑誌『ドン・ボスコの風』と一緒にその道を探していきませんか。

SALESIAN WORLD NEWS

第26回サレジオ会総会開催。チャーベス総長を再選。

【ローマ】本年2月から4月にかけて、ローマのサレジオ会本部にて6年に一度の総会が開催されました。3月25日、総長、副総長が再選され、さらに新しい最高評議員が決定しました。今後6年間のサレジオ会リーダーたちの誕生です。総長は選挙の結果が伝えられた時に次のように応えられました。「私は、この投票結果を、私への神の愛の表れとして喜んで受けとめ、私のいのちのすべてを兄弟会員と若者たちのために最後まで捧げます。」

「ドン・ボスコの風」創刊にあたって

「ドン・ボスコの風」は、サレジオ会創立者である聖ドン・ボスコが1877年にイタリアで創刊した雑誌"Bollettino Salesiano"の日本版です。創刊の趣旨は、世界に40万人を数えるサレジオ家族が共有するサレジオ精神を、さらに多くの皆様にお知らせすることです。没後120年経った今もドン・ボスコの心が風になって世界中に吹き渡っていくという思いを雑誌の名前に託しました。読者の皆様にその風を感じていただけるような雑誌を目指しています。

本誌は当面、年に2回お届けしますが、ドン・ボスコの意図を継いで無料とし、皆様からのご寄付で支えていただきたいと願っています。皆様からのご寄付は、下記の郵便振替口座にてお受けしております。

何卒よろしくお願い申し上げます。

郵便振替　口座番号　00100-7-412947

加入者名　「ドン・ボスコの風」編集事務局

ドン・ボスコの風　創刊号

BOLLETTINO SALESIANO

2008年5月24日発行

編集人　梅村 護

発行人　ブッポ・オランド

発行所　サレジオ会「ドン・ボスコの風」編集事務局

〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22-12 サレジオ管区長館

電話：03-3353-8355　Fax：03-3353-7190

Eメール：db-no-kaze@fiberbit.net

郵便振替　00100-7-412947

アートディレクター　後藤 宏幸

from Editor　編集後記

創刊号として、サレジオ家族の自己紹介と具体的な2つの活動をご紹介いたしました。また、創刊にあわせてサレジオ会のチャーベス総長の挨拶を掲載しました。今後引き続き皆様にドン・ボスコの「風」をお伝えしていきます。一方通行ではなく皆様からの声を大切にし、誌面に反映できればと考えております。忌憚のないご意見、ご感想、ご提案を左記のメールアドレスにお寄せいただければ幸いです。祝福されたこの雑誌が、皆様にドン・ボスコの心をお伝えするものでありますように。

(M)

ドン・ボスコの風 1 創刊号・2008年5月
BOLLETTINO SALESIANO MAGGIO 2008
発行：サレジオ会「ドン・ボスコの風」編集事務局 〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22-12 サレジオ会管区長館
TEL 03-3353-8385 FAX 03-3353-7190 Eメール [illegible]

2008 Strenna

Let us educate

with the heart of Don Bosco for the integrated development of the life of young, especially the poorest and most disadvantaged, promoting their rights.

Rector Major Fr Pascual Chávez

ドン・ボスコの心をもって、

若者の全人的成長のために働こう!!
特に貧しく恵まれない若者の
権利の促進に尽くしながら。

2008ストレンナ
総長パスクアール・チャーベス神父

ストレンナって？

イタリア語で「贈りもの」。ドン・ボスコの時代から続く、新年にサレジオ会の総会長から示される「今年の目標」です。

ドン・ボスコは、慈しみ深い愛で優しく忍耐強く、青少年教育に一生を捧げました。

家庭・学校・施設などで青少年の成長に関わっているすべての人たちは、
彼ら一人ひとりが神様から頂いたかけがえのない大事な存在だと気づくよう、
彼らの持っている無限の可能性を引き出し、豊かな人間に成長していけるように力を尽くしましょう。

青少年が人として生きていく権利を守るために、
彼らが疎外され脇に追いやられることのないような社会をつくるよう努めましょう。

そのために、ドン・ボスコが青少年に対して行ったように、彼らと共にいる時間を持ち、
納得のいくまで話し合い、彼らが良心に従うことができるように導きましょう。